

## タイにおける山岳少数民族ツーリズム

—歴史的経緯, 影響, そして持続可能な観光開発の試み—

片山 隆裕

### 1. はじめに

1974年, メキシコシティで開催されたアメリカ人類学会のシンポジウムにおいて, 観光が人文科学・社会科学の中のテーマとして取りあげられた。そのシンポジウムの成果がバレーン・スミスによって『ホストとゲスト—観光の人類学』<sup>1)</sup>という本にまとめられて以来, 「観光」は人類学において重要な研究テーマのひとつとしての位置づけを得てきた。アメリカでは, 1980年代を通じて, 観光は文化人類学の研究や教育プログラムの中に確固たる地位を確保し, 日本においても1990年前後から観光人類学という分野が市民権を獲得してきた<sup>2)</sup>。

その後, アメリカの人類学者D. ナッシュが「観光は現代世界において明らかに重要な社会的事実になりつつある」<sup>3)</sup>と述べてから, 10年以上が経過した。世界観光機関(WTO)によると, 1995年には世界で年間5億6348万人が国境を越えて旅行し, 年間3990億米ドルが旅行のために使われたとされるが, その後のアメリカにおける同時多発テロや, SARS, 鳥インフルエンザなどの騒ぎの中, 一時的な減少はみられるものの, 2004年における国際観光客の数は, 年間7億6000万人(推計値)になり, 年間9300億米ドルが旅行のために使われるという具合に, 観光はますます巨大化する現象となっている<sup>4)</sup>。今日のヒト, カネ, モノ情報などの「グローバルな文化のフロー」<sup>5)</sup>の中で, 社会の境界は薄れ, 文化は社会の境界を越えて享受されるプロセスにおいて, 観光は世界のあらゆる場所で, 文化のダイナミズムの問題と不可分のテーマとなってきた。

観光は、グローバル化、ボーダーレス化が進行する今日において、文化の生成と大きな関わりをもっているが、そうした状況の中で、伝統的な文化表象は一方で断片化されていき、もう一方で、特に観光というコンテキストにおいて再構成されていくのである<sup>6)</sup>。同時に、こうした文化表象の断片化や再構成のプロセスにおいて、ホスト社会には様々な問題が生じており、同時に、この問題を乗り越えるための試みが行われていることも事実である。

本稿では、主として、タイ北部に居住する山岳少数民族におけるツーリズムについて概観しながら、そこに生起している観光をめぐるいくつかの問題を提示し、その問題を乗り越える試みの一例について概観してみたいと思う。そのための作業として、第1に、タイにおいて観光が主たる産業になっていったプロセスを概観する。第2に、山岳少数民族社会における観光について、その経緯、影響、問題点について述べる。そして、最後に、山岳少数民族村落における観光によって生起する問題を乗り越える試みを紹介しながら、今後の観光のあり方や、ゲストとしての私たちの態度に関する提言を行ってみたい。

## 2. タイ・ツーリズムの概観

### (1) タイにおけるツーリズム時代の到来

第2次世界大戦前後頃まで、タイへの国際観光客の数は非常に小規模のものであった。例えば、1930年代には5隻の客船に乗ったおよそ500人の人々が、バンコクの港に入った程度であったという。戦後タイでは、1950年代にサリット政権の開発体制の枠組の中で観光が発展しはじめることになる<sup>7)</sup>。サリットは、観光のためのインフラの整備に着手するとともに、「タイ観光機構」(Tourism Organization of Thailand, TOT, のちの「タイ国政府観光庁」Tourism Authority of Thailand, TAT) を設立し、観光部門における外国からの投資を奨励した。

最も重要な観光産業の拡大期が訪れたのは、ベトナム戦争の時期である。この時期、タイはアメリカ兵がR&R (Rest and Recreation 休暇と娯楽) のために

訪れる主たる目的地となった。このことは、単に、タイを訪れる外国人が増加したというだけでなく、1960年代半ば以降、タイを訪れる観光客の特性を変化させる要因にもなった。従来、西洋人の眼には、タイは東洋の神秘的な王国として映っていたが、R & Rによるアメリカ兵の駐留によって、文化的魅力に富む遺跡や歴史的建造物を訪れる歴史文化観光の形態に加えて、より世俗的な性的娯楽を追求するという目的が含まれるようになっていくのである<sup>8)</sup>。そのため、観光客へのサービスを主たる目的とする売春婦が登場し、タイは「仏教寺院と売春宿」-ベトナム戦争後には、「エキゾチックとエロチック」-といった二重のイメージをもった国となっていくのである。

この二重イメージは、その後も再生産されることになる。「エキゾチック」の側面は、例えば、TATのパンフレットにみられる「アジアで最もエキゾチックな国」といったスローガンをはじめ、公式に外国に向けてアピールされてきた。一方、「エロチック」のほうは、公的な刊行物や広告などからは表向き消えることにはなるが、大衆向け刊行物、新聞、口コミを通じて、特に男性観光客にとって、多様で安価に性的娯楽を享受できる国-特に、バンコクは「アジアの売春宿」-として、広く知られるようになっていくことになる<sup>9)</sup>。この二重イメージは、相互に補完し合うかたちで、タイにおける近年の観光産業を拡大していくことになるのである<sup>10)</sup>。

このように、ベトナム戦争以降、旅行会社や政府機関を通してタイの観光は急速に拡大することになる。TATや投資委員会が観光開発を奨励し、ある程度の方向づけも行っていく。TATは1987年を「タイ訪問年」(Visiting Thailand Year)とし、国際観光客誘致のキャンペーンをはり、以降、タイを訪れる観光客は、年々増加の一途をたどることになるのである。

### (2) ツーリズムの拡大と多様化

過去35年の間に、タイを訪れる国際観光客は、1970年の約63万人から、2004年の1165万人と約18.5倍に増加し、観光収入にいたっては、21億7500万バーツ(1970年)から、3843億6000万バーツ(2004年)へと、約177倍にまで増加し

表1 タイを訪れる海外からの観光客と観光収入（1960～2004年）

	観光客数	観光収入 (百万バーツ)		観光客数	観光収入 (百万バーツ)
1960	81,340	196	1985	2,438,270	31,768
1965	225,025	506	1990	2,438,270	110,572
1970	628,671	2,175	1995	6,951,566	190,765
1975	1,180,075	4,538	2000	9,578,826	285,272
1980	1,858,801	17,765	2004	11,650,703	384,360

出所：『タイ国政府観光庁統計年報』『海外労働情報 タイ』より作成

た（表1）。このような国際観光客の増大は、国内観光の拡大を招き、これに伴って観光関連のインフラの整備やサービスの拡大も進められていくことになった。大量輸送時代の到来とともに、外国からの大型航空機のバンコク便が増加するが、国内線も路線充実や便数の増加がはかられ、夜行（高速）バスの本数も増えていった。このような輸送手段の充実とともに、ホテルやゲストハウスなどの宿泊施設や、土産物屋、レストラン・食堂などのサービス施設などの観光関連施設も充実度を増し、旅行会社や観光ツアーも増えていくことになる。

当初、観光客の関心をひき、観光地や観光施設があったのは、バンコクやその周辺地域（アユタヤなど）の有名な仏教寺院、水上市場、および歴史的遺跡などであった。当局による観光政策もこの地域に集中し、その結果、観光収入もこれらの地域に集中することとなった。しかしながら、観光政策の推進とともに進行するインフラの整備にともなって、観光は次第にチェンマイ、プーケットほか地方にも拡大していき、北部の山岳少数民族村落や南部の島々が、その目的地となった。当初、放浪旅行者や若者たちがその中心であった観光客の年齢層も、次第に幅広いものになっていった。

観光の拡大にともなって、タイには「北部-南部」を結ぶ観光の「軸」ができ、その中心にバンコクが位置していた。そして、北部ではチェンマイが、また、南部ではプーケットがその中心となり、この2つの地には国際空港ができた。さらに、チェンマイとプーケットを中心として、北部ではチェンライやメー

ホンソン、さらに、ミャンマーとラオスの国境地域であるゴールデントライアングルが、また南部のプーケット周辺にはタルタオ島、クラビ島、サムイ島、ピビ島などの島々や南部の中心都市ハートヤイを中心としたマレーシアとの国境周辺地域が観光地となっていった。さらに、この「南北軸」を中心として、シヤム湾沿いの海岸地域や西部のカンチャナブリを經由して、クワイ川渓谷を通過してスリーパゴダパスに至る地域や、パタヤ、ホアヒンなどを中心とするバンコク東部の東海岸からカンボジア国境へ至る地域なども観光地としての注目を集めるようになった。このようにして、タイの観光はイサーンと呼ばれる東北部-高原地帯にクメール遺跡が点在し、タイでは最も貧しい地域といわれる地域を除いて、国中のあらゆる地域に拡大していったのである。

1960年代後半から1970年代初めにかけて、タイへの外国人観光客の多くは北米からやってくる人々であった。しかし、1970年代以降、日本人観光客が急増し現在に至っているほか、ドイツ人、イギリス人、フランス人などヨーロッパ人や、台湾、韓国、シンガポールなどアジア諸国からの観光客も増加してきた。さらに、南部のいくつかの県を中心に、マレーシアからの観光客も常にタイにおける外国人観光客の多数を占めていた。このほか、アラブ人観光客や中国人観光客の増加も、タイにおける外国人観光客の多様化に拍車をかけていくことになった<sup>11)</sup>。このようなプロセスで、1980年代以降、タイでは観光収入がかつての主要な輸出品目であった米をしのいで、ほぼ毎年、外貨獲得額のトップを占めており、観光立国として地位を不動のものにしている（表2）。

### (3) ツーリズムの分化

外国人観光客の多様化にともなって、レストランやサービスなどの面における多様化も進んでいくことになる。ベトナム戦争当時以降の「エキゾチック&エロチック」という二重イメージを残したまま、タイ政府は、自然観光、歴史観光、民族観光、文化観光、リゾート観光など、多様な観光戦略への転換・修正をはかっていくことになる<sup>12)</sup>。ここで、それぞれの観光形態について、簡単にまとめてみよう。

表2 タイにおける外貨獲得上位5業種の推移

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
1975	米	もろこし	砂糖	観光	タピオカ製品
1980	米	観光	タピオカ製品	ゴム	錫
1985	観光	繊維・衣類	海外出稼ぎ	米	タピオカ製品
1990	観光	繊維・衣類	コンピュータ部品	米	ゴム
1995	観光	コンピュータ部品	繊維・衣類	IC	米
2000	コンピュータ部品	観光	IC	繊維・衣類	車両・部品など

出所：『タイ国政府観光庁統計年報』、『タイ国経済ビジネスデータベース』（元田時男）により作成。

**\* 自然観光**

自然観光の主な対象となるのは、1961年の国立公園法によって1962年に最初に指定が始まった国立公園である<sup>13)</sup>。国立公園は、タイ人と外国人の観光客の訪問を前提としている一方で、自然保護の対象ともなっており、旅行ガイドブックや地図などに記されている。また、そのほかの魅力ある自然の地には、タイ語と英語での看板が掲げられている。自然観光は、例えば、冒険ツアーや野生ツアー、洞窟探検、エコツーリズムなど、さまざまな観光形態を生み出している。

**\* 歴史観光**

近年、タイ政府当局は、タイヤクメールなどの主要な歴史的建築物や遺跡への観光を奨励している。1988年に開園したパノムルン遺跡をはじめとする10の歴史公園を整備したが、これは観光の目的だけでなく、ナショナリストからの要求とも関わっている。数多くの歴史の地、歴史的建造物、博物館などが公開され、そのうちのアユタヤ、スコタイなどはユネスコの世界遺産にも指定されており、国内国外からの観光客にとって重要な観光地となっている。

**\* 民族観光**

タイを訪れる観光客は、通常タイ人やタイ文化に関心をもつが、北部の山岳少数民族居住地域を中心に狭義での民族観光が行われている。山岳少数民族観光は、1970年代に若い観光客の間で人気を呼ぶようになり、多くの若者が山岳

地帯のトレッキングツアーに参加するようになった。特に、チェンマイからさほど遠くないモン族のドイ・プイ村は、かなり早い時期に観光用に開発された代表的な村であり、都市と同じような数多くの土産物店だけでなく、国際電話サービス、郵便局などをはじめとするサービス施設が整っており、村人たちはいわゆる「つくられた山岳民族の村」を演じている。このような民族観光ルートに組み込まれる山岳少数民族村落は、この30年あまりの間にどんどん拡大してきている。また、このほか、民族観光は海のジプシーや狩猟採集民なども対象としている。

**\* 文化観光**

バンコクにあるワット・プラケオやワット・アルン、アユタヤにあるワット・マハタートなどをはじめとする数々の有名な仏教寺院は観光の主要な対象となってきたが、近年では、ソクラーン、ローイクラトンをはじめとするさまざまな伝統的行事に娯楽的要素が加わり、博覧会、民族（民俗）芸術などとともに、観光客にとって極めて重要なものとなってきている。このようなものの中には、ウボンラチャタニーの蠟燭祭り、スリンの象祭り、プーケットのベジタリアン・フェスティバルなどが含まれている。また、チェンマイの花祭り、カムペーンベットの卵とバナナ祭りなど新しい祭りが創造されたり、古い祭りが観光客の集まる場所で催されたりするようになり、北部のダンキウエン陶器村、バンタワイ彫刻村などの民芸品が、観光客の注目を集めるようになった。

**\* リゾート観光**

前述したように、タイの観光が南部地域に拡大していくのは、島々や海岸部にオープンしたビーチの役割が大きい。リゾート観光は、3つの「s」（すなわち、海 sea, 太陽 sun, 砂 sand）を基盤とするが、次第に、様々なゴルフツアーのようなレジャースポーツや、ダイビングツアーなどのマリンスポーツが可能となり、単なる3つの「s」を越えたところで成り立つようになっていったが、さらに近年では、ヘルスリゾートをめざした観光も展開するようになってきている。

#### (4) ツーリズムの地域連携化<sup>14)</sup>

タイにおいて観光産業が盛んになりはじめた当初、タイの周辺諸国は観光産業に必要なインフラを事実上もっていなかった。また、政治的にも不安定要因が多かったこともあり、タイの北部や東北部を訪れた観光客が、そのままミャンマー、ラオス、カンボジアなどに足をのばすことはできなかった。南部のマレーシアとの国境は開かれており、マレーシア人の観光客がタイを訪れることは多かったが、その大半はハートヤイ以南に限られていた。

しかし、1990年代に入って、タイとその周辺諸国の関係が次第に改善されていくにつれて、タイの観光をめぐる状況も急速に変化した。1988年から1991年まで首相を務めたタイのチャートチャイは、「戦場から市場へ」という東南アジアに関する新しいスローガンを打ち出した。1994年には、オーストラリアの援助によりラオスとの国境に「友好橋」が完成し、ラオスの観光振興政策と相まって両国間の観光客の行き来が盛んになっていった。ミャンマーとの関係も、「建設的 engagement」政策が実り、ミャンマーが観光地として開放されていくにつれて、タイからシャン州の州都セントゥンを訪れる人々が増え、セントゥン-チェンライ間に航空機も就航するようになった。また、タイ北部と中国雲南省との関係も、特に、雲南省のタイ族居住地区である西双版纳（シーサンパンナー）を故地とするタイ人にとって重要性を増し、メコン川を通る船便、景洪（西双版纳）-チェンマイ間の航空便を通じた往来が可能となった。このようにして、東南アジア北部の経済の四角形に平行したかたちで観光の四角形が形成されていくのである。カンボジアとの国境越えの観光については、地雷の問題やインフラの未整備などによって未だ盛んとはいえないが、バンコク-プノンペン間に航空便が就航し、特に1998年の政治的安定以降、カンボジア最大の観光地であるアンコールワット観光による観光客の増加が、見られるようになってきた。また、タイはベトナムとは国境を接してはいないが、タイとベトナム両国の航空便によるつながりは強いものがあり、両国を訪れる外国人観光客が増えている。このような観光を媒介とする東南アジア大陸部諸国・地域の連携化は、この地域における国際観光客の拡大に拍車をかけているといえる。

### 3. 山岳少数民族ツーリズム

#### (1) タイの山岳少数民族

前述したように、山岳少数民族観光は、1970年代に若い観光客の間で人気を呼ぶようになり、多くの若者が山岳地帯のトレッキングツアーに参加するようになったことに始まるが、この30年あまりの間にこの地域を訪れる人々が増加しただけでなく、観光客の年齢層も幅広いものになってきている。本章では特に、山岳民族をめぐるツーリズムについて述べるわけだが、その前に、タイに住む主な山岳少数民族について概観しておきたい<sup>15)</sup>。

タイの北部、東北部、西北部の山岳地帯には、およそ91万5000人の非タイ系山岳少数民族が住んでいる。タイ語で「チャオ・カオ」（山地民、山の民）と呼ばれるこれらの人々に関して、内務省公共福祉局（Krom Prachaa-Songkhro）は、カレン族、モン（メオ）族、ミエン（ヤオ）族、ラフ族、アカ族、リス族などの主要民族のほか、ルア族、ティン族、カム族、ムラブリ族などを定めている。これらに加えて、タイヤイ族、ホー族、国民党など中国系、タイ系の少数民族も山岳地帯に居住していることもあり、近年、チェンマイ大学の研究者たちによってその存在が確認されたパロウン族や、ミャンマーから難民として入ってきたパダウン族などの人々もいる。非タイ系の少数民族の多くは、およそ100~150年ほど前からタイに移住してきた民族で、モン族、ヤオ族は中国から、ラフ族、アカ族はチベットから、リス族はビルマや中国から、そして、カレン族はビルマから移住してきたといわれる。

カレン族は、100年以上前からビルマからタイに移住してきた民族で、タイ国内に約43万8,131人が住んでおり、国内の山岳少数民族の約47.5%を占めている（以下、山岳少数民族の人口は、2002年の推計値による）。居住地域は、メーホンソン県、チェンマイ県、チェンライ県、ターク県、カンチャナブリ県、ランブーン県などのタイ北部であるが、特に、タイとミャンマーの国境沿いの西部山地に集中して住んでいる。タイには、4つのカレン族のサブグループがいることがわかっている。スゴー・カレンまたはパー・カン・ヨー、自称パ

ローンのポーカレン、パー・オーまたはトウントゥ、そしてプウェーまたはカヤーである。カレン族の経済は、稲作を基本としている。水稻を作るために棚田を作っている人々もいるが、大半は循環型の移動焼畑耕作を行っている。米のほかに、野菜や唐辛子などを栽培し、豚、鶏、牛、象などさまざまな家畜を飼育している。家畜は、儀礼における供物や祝宴で食されることもあるが、労働用に用いられることもある。織物技術をもち、未婚の女性は白い服を、既婚女性は色のついた服を着用する。そのほか、地元の商品の販売や雇用労働によって、収入を得ている人々もいる。社会組織は、世帯、リネージ分節、リネージ、集落、集落の集合体などを基礎にして成り立っている。世帯を形成するのは核家族である。政治組織は、伝統的首長が統括する年長者グループによって構成されているが、今日では、ほとんどの村において首長は村人が決定する。カレン族の大半は精霊信仰であるが、タイ国内には多数のキリスト教徒がおり、仏教徒になっている者もいる。

モン族は、その大多数が中国南部に居住している民族であるが、中国内の各省やベトナム、ラオス、タイなどにも居住している。タイ国内に約15万3,955人が居住しており、タイ国内の少数民族の16.7%を占めている。居住地は、チェンマイ県、チェンライ県、ナーン県、プレー県、ターク県、ランパーン県、パヤオ県、ペチャブン県、メーホンソン県、カムペーンペット県、ピサヌローク県、ルーイ県、スコタイ県の13県である。タイには、2つのサブグループがあり、青モン族（黒モンまたは縞モンとしても知られている）と白モン族（女性たちは儀礼の場面では白の襪のスカートをはき、仕事の際には藍染めのズボンをはく）として知られている。モン族は、標高の高い山地で生活することを好み、従来は移動耕作を行っていた。米とトウモロコシを栽培するとともに、換金作物として芥子を栽培している。彼らはアヘン栽培にも深く関わっている。父系の大家族制をとっており、複婚で族外婚の慣習をもつ。家族が最も重要な基本的単位であるが、家族を超えたレベルではクランがすべての活動の中心として機能している。タイに住むモン族の宗教は、精霊信仰とシャーマニズムであり、祖先崇拝を重んじている。シャーマンは村人に対して大きな影響力をも

つ。シャーマンは、危機的状況に陥ったときの希望であり、強力な医者でもあり、危険な状況においてどのように行動すべきかを示してくれる存在でもある。それゆえ、モン族の人々はシャーマンのいるところで暮らすことを望み、シャーマンもまた人々とともに暮らすことを望む。

ヤオ族（自称ミエン族）は、中国からラオスを経由してタイに移住してきた。タイ国内に4万5,551人が居住しており、山岳少数民族人口の4.9%を占めている。居住地は、チェンライ県とパヤオ県に集中しているが、チェンマイ県、ランパーン県、ピサヌローク県、スコタイ県、カムペーンペット県にもヤオ族村落が存在する。芥子の栽培のほか、陸稲とトウモロコシの移動耕作を行っている。近年では、メイズや綿花も重要な作物となっており、緻密で精巧な刺繍技術をもっている。精霊に捧げるための重要な供物と考えられている豚や鶏をはじめ、運搬用の馬、荷引き用の牡牛や水牛などの家畜を飼育している。拡大家族の形態をとり、複婚の習慣がある。モン族と同様、青年は結婚相手をクラン外から選び、父方居住を行う。子どもが生まれると父系クランに属する。婚前性交渉と交叉イトコ婚を實踐し、ヤオ族内外からの養子縁組も行われている。村落には村人によって選ばれる首長がいるが、タイ政府の影響が強いところでは、首長の選挙に際してタイ政府の役人が影響力を行使することもある。精霊信仰であるが、中国人から影響を受けた様々な儀礼を實踐している。祖先崇拝を重要なものと考え、祖霊に豚や鶏を生け贄として捧げる。

ラフ族は、チベット高原を起源としており、数世紀にわたって中国、ミャンマー、ラオス、タイに移住してきたと考えられている。チェンライ県、チェンマイ県、メーホンソン県、ターク県、ランパーン県、カムペーンペット県に10万2,876人が住んでいる。7つのサブグループに分かれているが、タイにはラフ・ニ、ラフ・ナ、ラフ・シェレ、ラフ・シの4グループが住んでいる。主として焼畑に依存しており、主要作物は陸稲とトウモロコシである。メロン、唐辛子、豆類、ヤマノイモ、キビ、野菜など、様々な2次作物も栽培されている。ほとんどの世帯では、祝宴、儀礼、運搬などのために豚、鶏、牛などの家畜を飼育している。ラフ族のクランは母系制で、単婚である。大部分の家族が核家

族で、社会組織上は親族の紐帯が極めて重要である。政治的指導者は村人に受け入れられており、尊敬を集めている。精霊信仰であるが、他の民族のような祖先崇拜はない。ビルマにいたときは、仏教とキリスト教の影響を受けており、ビルマで暮らすラフ族の多くはキリスト教に改宗してきたが、タイで暮らすラフ族の大多数は旧来の信仰を維持しており、呪術師の存在も大きい。

リス族は、中国南部やチベットを起源として60年余り前くらいからタイに移住してきた。タイ国内には3万8,299人が、チェンマイ県、チェンライ県、パヤオ県、メーホンソン県、ターク県、スコータイ県、カムペーンペット県、ペチャブーン県、ランパーン県、プレー県に居住している。リス族は、3つのサブグループ—白リス（バイ・リス）、花リス（ファ・リス）、黒リス（ヘ・リス）—に分類されるが、タイ国内に住んでいるのは、花リス族と黒リス族という2つのサブグループである。移動焼畑耕作を行ってきたが、現在は代用作物として米、トウモロコシ、野菜を、換金作物として芥子を栽培している。また、豚や牛などの家畜を売って収入を得ている。リス族は7つの父系クランから成る。クランは、親族関係と婚姻を決定づけるので重要である。単婚で外婚制をとっている。家族の複合体が親族を形成し、より広範な部族社会へと拡大していく。世俗的な意味での政治的リーダーが不在なため、こうした繋がりには社会的統合を築く上で重要であり、この点は他の山岳少数民族とは異なっている。リス族は精霊崇拜であるが、新年を中国の暦で祝うといったように、中国から数多くの文化的影響を受けているが精霊崇拜である。

アカ族は、チベット高地を起源とするといわれているが、いつ頃タイに移住してきたかを示す証拠はない。タイ国内に約6万8,653人が、チェンライ県、チェンマイ県、ランパーン県、ターク県、プレー県などに居住している。標高1000～1300メートルのところに住み、移動耕作を営んでいる。食用として陸稲をつくり、トウモロコシ、キビ、唐辛子、豆類、野菜類などを栽培している。また祝宴や供物用に、鶏、豚、牛などの家畜を飼育している。最も明確で基本的な社会組織は拡大家族であり、親族の紐帯や結婚に関わるすべてにおいて基本的な役割を担っており、居住様式や継承権などもこれに従っている。伝統的

に、単婚で外婚規制をとっているが、男性が2人以上の妻を持つことを妨げるような規則はない。結婚後は夫方居住を行う。厳格な精霊崇拜を行っており、祖先崇拜と精霊供儀を重要なものとみなしている。9月から10月頃には、空と土の精霊に感謝するためにブランコ祭りを行う。悪霊が体内に入ったためであり、不幸の印として、双子を忌み嫌い、双子が生まれると2人とも殺してしまうか、その夫婦は村を出なければならぬ。

このほか、ルア族またはラワ族とよばれる人々は、西暦600年くらいから北部地帯あるいはピン川渓谷に移住してきたと推定されており、現在、ポー・ルアン平地、チェンマイ県南西部、アムパイ山地、メーホンソン県南部に2万2,260人が暮らしており、その多くはタイ社会に同化している。また、北部のタイラオス国境地域（ナーン県）で移動耕作を営んでいるティン族は4万2,657人が、同じくタイラオス国境（チェンライ県、ナーン県）には1万573人のカム族が暮らしている。さらには、タイ人の間で「ピー・トン・ルアン」（黄色い葉の精霊）と呼ばれている小規模（2002年推計で282人）の狩猟採集民ムラブリ族や、主としてミャンマーのカヤー州に住むカレン族のサブグループ（プウェ集団）であるパダウン族などが住んでいる。パダウン族は、女性が首に真鍮の輪を身につけており、首が長いことで知られている。

## (2) 山岳少数民族ツーリズムの展開

以上述べてきた山岳少数民族がタイ政府の監督下におかれるようになるのは、第2次世界大戦以降のことである。1950年代、東西冷戦下のインドシナで緊張が高まる中で1953年にラオスに社会主義政権が誕生すると、タイラオス国境を監視する国境警備隊（Border Patrol Police）が設立され、1955年タイ北部にまで拡大された。1959年には、内務省公共福祉局に、移動焼畑耕作に伴う森林伐採による河川流域の悪化、アヘン栽培、国境地域の安全などの問題解決を目的とした山地民福祉委員会（National Tribal Welfare Committee）が設立され、このとき政策の対象となる非タイ系の山岳少数民族を総称する「山地民」（Chao Khao）というエスニック・カテゴリーが示されたのである。公共福祉

局は、1960年にタイ北部諸県に山岳少数民族居住地の設置を開始し、翌年には「北部タイ山岳少数民族の社会経済調査」が、モン、ヤオ、リス、ラフ、アカというケシ栽培を行う5つの民族を対象に実施された。1965年には、SEATOとイギリス・オーストラリア政府の援助により山岳少数民族研究センター（Hill Tribe Research Center）が設立され、山岳少数民族への仏教普及計画（タンマーチャリク・プロジェクト）も開始された。1960年代後半には、山岳少数民族社会の開発と福祉を目的としたロイヤル・プロジェクトが開始された<sup>16)</sup>。1970年代以降、政府の山岳少数民族政策が整備されるようになる時期と、宣教師、学者、一握りの旅行者しか訪れたことのなかったこの地域が、ビジネスとして観光の潮流に組み込まれていく時期が重なっていく。

山岳少数民族の村への観光が開始されたのは、1970年代はじめのことである。1973年には、タイ北部のチェンライを流れるコック川沿いの2泊3日のトレッキングツアーが開始されたが、当初はトレッキングツアーのほとんどがコック川沿いの山岳少数民族居住地に限られていた。トレッキング自体が面白みに欠ける点や、悪名高い麻薬王クンサ將軍が暗躍する北西部地域の安全性などの点から、その拡大ルートも限定されていた。トレッキングツアーが組織的に実施されるようになるのは、1970年代も後半になってからのことである。主として、チェンマイにあった「森のツアー」を実施する旅行会社で、山岳少数民族は観光産業に組み込まれていく<sup>17)</sup>。山岳少数民族のイメージは、西洋の都市文明と対局に位置するものとされ、当初、トレッキングツアーは、若く冒険心にあふれた放浪の旅行者を対象としていた。1970年代も後半になると、オーセンティックな（本物志向の）文化を求めて、通常、旅行者が行かないようなところへのツアーが始まった。トレッキングルートも拡大され、旅行会社によってさまざまなルートが開拓され、その範囲も広がっていった。ベトナム戦争も終盤にさしかかっていたこの時期、多くの旅行者—特に若者たち—が、旅行会社のパンフレットにおどる「未開」「半—未開」「無垢の」「色彩豊かな」といった現代文明や都市文化とは対極にある山岳少数民族の生活様式に魅せられ、多くの旅行者たちが山岳少数民族の伝統文化に関心を抱くようになったのである。



写真1 コック川沿いのトレッキングの拠点・ルアムミット村（カレン族）

1978年頃になると、トレッキングツアーの登録会社は14社ほどになり、そのツアー内容も以下のように整備されてくる。まず第1に、「山岳少数民族村落ツアー」（Tribal Village Tour）であり、根拠地となる都市を起点として、自動車、ボートなどを使って、比較的アクセスしやすい幾つかの山岳少数民族村落を訪問するというものである。このタイプのツアーには、さらに2つのサブタイプに分けることができる。ひとつは、「タウン・ツアー」とよぶことのできるタイプである。これはチェンマイにある多くの旅行会社が行っており、ピックアップトラックやワゴン車を利用して、山岳少数民族村落を訪れる日帰りツアーである。モン族のドイ・プイ村やカレン族のファイ・ラ村などがその代表的な目的地として挙げられ、これらの村には通常1日に数百人規模の旅行者が訪れる。もうひとつは「エクスカージョン・ツアー」とよぶことのできるタイプである。チェンマイやチェンライから、自動車やボートで行くことのできる山岳少数民族村落を訪問する1～2日のツアーで、コック川沿いのチェンライ県メーチャン郡にある複数の山岳少数民族村落を訪れる1～2日のツアーな



どが代表的なものとして知られている（写真1）。旅行会社によって提供されるツアーであるが、毎日実施されているというわけではない場合も多く、山岳少数民族村落を訪れる旅行者の数も、前者のように数百人規模にはならない。第2には、「ジャングル・ツアー」（Jungle Tour）とよばれるものである。これは、辺鄙で簡単には行くことのできない山岳少数民族村落を訪問するもので、最低でも1泊はしなければならない。このタイプのツアーもさらに2つのサブタイプに分けることができる。ひとつは「スタンダード・ツアー」とよばれるものである。これは、チェンマイにある旅行会社によって提供されるもので、標準的には3日間のトレッキングツアーの間にコック川の北部流域近くの山岳少数民族村落の幾つかを訪れるものである。旅行シーズンには、1日に30~40人程度の旅行者たちが訪れる。このツアーの対象となる村には、ファイ・サラ村（ラフ族）、ラオ・タ村（リス族）、ヤパ村、コエ村（ともに、アカ族）、ムアン・ンガム村（国民党）などが挙げられる。もうひとつは「特別ジャングルツアー」といえるものである。これは5日間から2週間以上にも及ぶトレッキングツアーで、月に3~4の小グループしか訪れることはない、その対象地は、チェンライ県のドイトウン地域にあるバーン・マイ、サム・サオなどのリス族の村や、アカ族、ラフ族などの村であった<sup>18)</sup>。

1980年代~1990年代になると、タイにおける観光産業構造の変化やマスツーリズム時代の到来とともに、トレッキングツアーに参加する人々が増加し、毎年10万人以上の若者たちがこの地域を訪れるようになった<sup>19)</sup>。このような状況と平行して、インフラの整備がなされ、多くの山岳少数民族村落へのアクセスがより容易になった。そのため、旅行者個人でピックアップトラック利用したり、バイクやジープを借りたりして、トレッキングツアー会社を通さずに、自由に山岳少数民族の村に入ることも可能になった。宿泊施設も充実し、整備されたものになり、山岳少数民族以外の人々が経営・所有するようなものもあらわれた。メーサ渓谷、メーサリアン、パイなど、チェンマイから比較的近い地域には、ホテルやゲストハウスが急増した。1978年にはわずか14社であった旅行会社は、1993年には120社を超え、現在は200~300社に上ると推定されて

いる。

このような山岳少数民族村落への観光の拡大に伴って、若者だけではなく中高年の旅行者たちも、山岳少数民族村落を訪れるようになっていく。前述したチェンマイ近郊のドイプイ村（モン族）は、チェンマイから1時間ほどで行けるようになった<sup>20)</sup>、道路が整備されたことによって中型・大型のバスで行けるようになった山岳少数民族の村には、旅行シーズンになると西洋人の観光客が大挙して押しかけるようになったのである<sup>21)</sup>。こうして、以前のような純粋に孤立した村はほとんどなくなった。山岳少数民族の人々は、その魅力の源泉であったカラフルな民族衣装を脱ぐようになり、旅行者の山岳少数民族イメージと現実の彼らの生活とのギャップが広がっていった。そのため、トレッキング会社は、象乗りや筏での川下りなど、ツアーに新たなアトラクションを付け加えるようになった。また、さらなるオーセンティシティ（本物）を求める旅行者は、タイを離れ、ラオス、中国、ベトナムなどに行くようになってきている。

### (3) 山岳民族ツーリズムの影響

観光客がゲストとして訪れるホスト社会の山岳少数民族村落にとって、観光によって得られる最も重要なものは経済的利益である。かつて、少数民族にとって換金作物といえばアヘンであったが、当局の規制・禁止によって芥子の栽培ができなくなり、同時に市場経済が浸透しはじめたいま、観光は山岳少数民族の人々にとって重要な収入源となっている。山岳少数民族の人々は、観光に関連した様々な活動—手工芸品の製作・販売、宿泊、写真撮影をはじめとする多様なサービス、物乞いなど—によって、経済的利益を得るようになってきている。中でも、手工芸品をはじめとする観光土産品の販売は、多くの村や人々にとって重要な収入源である。これらの手工芸品は、NPOを通じて販売されたり、バンコクやチェンマイなどにある土産物店で販売されたりしており、主な買い手は外国人観光客であるが、海外に輸出されることもある。山岳少数民族の人々自身が村内で、また、チェンマイ、チェンライなどの町に出かけて行って、直接販売することも少なくない。手工芸品の販売は、特に、山岳少数民族

村落ツアーで観光客が立ち寄る村にとっては重要である。例えば、前出のドイ・プイ村（モン族）は多くの観光客が訪れるため、村中の多くの家が土産物販売をしており、モン族の品物だけでなく、タイの一般的な観光みやげや他の山岳少数民族の商品、さらには、他の国や地域—たとえば、チベット、インド、中国など—などの品々までが売られている。しかしながら、ドイ・プイ村を歩いてみると、観光客がピックアップトラックで到着する村の入り口の駐車場付近の店と村の奥のほうにある店では、明らかに観光から得られる収入には開きがあるようである。このように、観光収入から得られる経済的利益には、ひとつの村に限ってみても格差が生まれるし、観光客の多寡によって村ごとの格差も生じている。すなわち、「タウン・ツアー」によって多くの観光客がやってくる村とは違って、「ジャングル・ツアー」などのように、観光客が少ない辺鄙な地域の村落では、観光による収入に多くは望めないのである。観光産業の拡大によって、市場経済に巻き込まれるようになった山岳少数民族の人々の間の、経済格差はますます拡大する傾向にある。

観光産業の拡大は、その対象となる村にいたる道路の整備や舗装化、電気や電話の敷設など、インフラの整備の促進につながっている。ドイ・プイ村には整備された山岳少数民族博物館があるが、郵便サービスはもとより、国際電話もかけられるなど、インフラ、ソフト面を含めて、この30年大きく変化してきた。チェンマイ、チェンライなどの拠点から車で比較的容易に入ることのできる村は、観光収入の増加に伴ってどんどん変貌している。電気がくればテレビを持つ家が増え、さらに近年ではDVDのデッキがある家、パソコンのプレゼンテーションソフトを使用して、観光客に村の生活を紹介する設備などが整っていくのである<sup>22)</sup>。

多くの観光客が頻繁に訪れる山岳少数民族村落の人々は、観光客との接触を繰り返しながら、観光客の言語を学んでいくという傾向もみられる。筆者は、1993年に初めてドイ・プイ村（写真2）を訪れたが、この10年余りの間に村の子どもたちが「こんにちは」「ニイ・ハオ」「ボンジュール」「ハロー」「グーテンモルゲン」「アンニョンハセヨ」「チャオ」など、世界各国の挨拶言葉を身に



写真2 ポーズをとるドイプイ村（モン族）の子ども

つけるようになったことに驚いた。それだけ、この村には外国からの観光客が数多く訪れ、観光客の国籍も多様化していることがわかる。多くの土産物店で、日本人とみるや日本語で「安いよ!」「5つで1000円!」、アメリカ人とみるや「スリー・ハンドレッド・パーツ!」など、片言ではあるが世界各国の言葉で観光客に対峙する山岳少数民族の人々を幾度となく眼にしてきた。また、チェンライ県タトーン地区には、パダウン族（首長族）、アカ族、パロウン族が集められた「開発新村」（バーン・マイ・パッタナー）と呼ばれる観光客向けの典型的な山岳少数民族村落があるが、この3年ほどで片言の日本語や英語を話す人々が増えているのに驚かされた<sup>23)</sup>。

観光の拡大は、ホスト社会にさまざまな社会文化的な影響ももたらしている。山岳少数民族の村に観光の波が押し寄せてくると、彼らの本質的な伝統文化とは別に、観光客に見せるための伝統文化やツーリストスペースというものも生まれる。観光客はそのルートに沿って土産物屋を見ながら、村を歩く。途中で、水パイプやアヘンパイプを吸っている老人や伝統的衣装に身を包んだ女性や子どもたちのポーズにカメラを向け、少しばかりのチップを払い、その店で値段



写真3 土産物を売るパダウン族の女性

の交渉をしながら土産物を買求める。村の老人や女性や子どもたちは、観光客向けに用意されたツーリストスペースで、観光客に対して「演技」と「微笑」を提供することになる。観光客向けに伝統文化は抽出され、あるいは、切り取られ、演出を加えられたかたちで提示されることになるのである。先述した「開発新村」(バーン・マイ・パッタナー)では、アカ族のスペースは無料だが、パダウン族とパロウン族がいるスペースには200バーツの入場料を支払って入村しなければならない。この村は、2002年に作られた村で、ミャンマーから移住してきた少数民族の人々が土産物店を開いている。ここでは、観光客は小1時間ほど滞在し、それぞれの民族の文化について深く知ることもなく、写真を撮り、何がしかの土産物を買って、村をあとにする。村で売られている品物は、必ずしもパダウン族やパロウン族のものではない。旅行エージェントによって大量生産されているような布製のバッグや人形なども、当たり前のように並べられている(写真3)。観光客用の手工芸品販売は、山岳少数民族村落に経済的利益をもたらすだけでなく、伝統的文化の保存や復興に一役買うという役割

を果たしているが、一方で、市場圧力は手工芸品や伝統的文化の本質やオリジナリティに、観光客のニーズに応じた変質を迫ることも少なくないし、観光客に文化の本質を正確に伝える装置としても機能しなくなってきているのである。こうして、山岳少数民族自身によってではなく、政府や旅行者などの外部者によって始められた山岳少数民族ツーリズムにおいては、それぞれ「偽の」あるいは「簡略化された」特徴を残すだけの土産物が大量生産され、観光客によって大量に消費されることにつながるし、業者などによる中間搾取によって、利益を十分に挙げるができない場合も少なくない。このような状況に飽き足りない観光客は、「オーセンティックな」(本物の)文化を求めてさらに辺鄙な村へ向かうことになるのである。

ホスト社会である山岳少数民族の人々にとって、ゲストである観光客は優位にある存在に映る。また、観光客は自分たちの村に少しの時間滞在してさっと通り過ぎていく存在である。ハイテク用品、輸入物、お洒落なファッションなど観光客が身につけているものや所有物などは、山岳少数民族の人々にとって魅力のあるものに映る。ゲストである観光客を通して、山岳少数民族の人々特に、若者たちは一外来文化を取り入れていくことになる。観光収入によって得たわずかな現金で、これらを手に入れることには、一方で、伝統的なものを捨て去っていきことにもつながるのだが、こうして、山岳少数民族は容易に市場経済の中に組み込まれていくのである。特に、衣服やファッションの面でこの傾向が強い。西洋風の衣服が日常的に着用されるようになり、伝統的な民族衣装は徐々に見られなくなり、観光客の前でだけ着用されるようになっていくのである<sup>24)</sup>。

山岳少数民族ツアーやトレッキングにおいて、麻薬に興味をもっている若い旅行者たちにとって、麻薬吸引は関心事のひとつとなっている。山岳少数民族の間で生活の一部であったアヘンは、タイ政府の撲滅政策とともに減少しているが、観光客が示す麻薬やアヘンへの関心によって、再び麻薬やアヘンとの距離が近づきつつある。観光収入によって現金が入ってくることによって、従来から吸引されていたアヘンなどに代わって、近年、特に錠剤型の覚醒剤を入手

したり、さばいたりする人々も増えている<sup>25)</sup>。

観光産業の浸透は、山岳少数民族の人々の自己イメージや威信の喪失や破壊を招くようにもなっている。観光客の個人や団体の眼に日常的にさらされ、レポートも十分ではないままに被写体となることによって、山岳少数民族の人々は自らを人格をもった1人の人間としてではなく、単なる対象やモノとして考えるようになる。お金のために観光客の要求に従順に応じながら接していくことになるのである。物乞いは、この最もわかりやすい威信喪失の形態といえるが、このほかにもカメラに向かってポーズをとったり、おどけてみたり、外国の言葉や歌をオウム返しに真似てみたりといった行動などもこれに含まれる<sup>26)</sup>。

観光地において、ホスト（山岳少数民族）とゲスト（観光客）との接触は、直接的に行われる場合もあるが、ガイドを通じて間接的に行われることも少なくない。直接的接触の場合、観光客が山岳少数民族の人々の言葉を話せることはほとんど皆無で、一部の観光客がタイ語の片言で、これまたタイ語を母語としない山岳少数民族と会話をできる程度である。山岳少数民族の側も、英語や日本語を流暢に話せる人はほとんどおらず、挨拶や値段の交渉のときの数字が話せる程度である。この場合、山岳少数民族観光においてガイドの役割は重要になってくる。山岳少数民族観光のガイドの多くはタイ北部出身者（コン・ムアン）であり、中にはシャン族をはじめとする山岳少数民族出身の者もいるという。ガイドの多くは比較的若く、少なくとも高校は卒業しており、ある程度の英語を話すことができる<sup>27)</sup>。しかしながら、ガイドといっても、地図がうまく読め、当該地域の地理を熟知している人は少なく、山岳少数民族の人々にとってはあくまでも異文化に属する外部者である。観光産業ルートに組み込まれ、観光客慣れしている村はまだしも、観光客の訪問が少ない村であれば、ガイドはまず彼（女）自身の立場を山岳少数民族の人々に理解してもらうことに腐心しなければならず、同時に、ガイドとして山岳少数民族の人々が彼（女）の「客」たちにホスピタリティを示すよう努めなければならないのである。ガイドは、まずホスト社会とのアイデンティティを強めなければならないが、この場合、タイ人のガイドであっても、山岳少数民族の言語が話せたり、山岳少

数民族の村に友人を作ったり、親戚がいたりすれば強みになるし、ときには贈り物をしたりすることによって山岳少数民族社会にとけ込む努力をする。しかし、もちろん、このようにガイドばかりなのではなく、まして山岳少数民族の文化に熟知して、その文化を誤解のないように理路整然と解説できるガイドばかりではない。そのため、観光客は短期間（あるいは短時間）の滞在のなかで、山岳少数民族について表面的な知識を得るか、もしくは、ときに（ガイドを通じて）誤った知識を得て、村を離れることも少なくないといえるだろう。

このように、山岳少数民族村落へ観光の浸透・拡大は山岳少数民族の村々に様々な影響をもたらしてきた。もちろん、プラスの影響もあるが負の影響も少なくない。そして、そのような問題状況に対応するための解決策の模索がなされてきたことも事実である。そこで、次章ではその試みのひとつとしてタイの非政府組織による山岳少数民族村落における「もうひとつの」「持続可能な」観光開発の活動を紹介してみたい。

#### 4. 山岳民族村落における「もうひとつの/持続可能な観光開発」

##### (1) 「もうひとつの観光開発」あるいは「持続可能な観光開発」

タイにおける観光産業の拡大は、タイの社会と経済に多くの観光客と外貨をもたらしてきたが、観光開発に伴う自然環境の破壊、観光収入による利益の不平等配分、消費主義の浸透、地域社会の伝統文化の崩壊、そして麻薬や買売春の蔓延などといったマイナスの影響ももたらしてきた。こうした状況が世界各地で展開する中、1989年にポーランドのザコパネで開かれた第1回国際研究アカデミーの総会において、「観光の代替的形態に関する理論的展望」というテーマが取り上げられて以降、従来型の観光とは異なる「もうひとつの観光」が模索されている<sup>28)</sup>。その試みは、「適正観光」(appropriate tourism)、「責任ある観光」(responsible tourism)、「小規模観光」(small scale tourism)、「制限された観光」(controlled tourism)、「柔らかい観光」(soft tourism)、「グリーンツーリズム」(green tourism)、「やさしい観光」(gentle tourism) などさまざまな言葉で

呼ばれている<sup>29)</sup>。そして、今日の開発におけるキーワードである持続可能性という言葉は、観光開発においても用いられている<sup>30)</sup>。

「持続可能な開発」(Sustainable Development)とは、通常、「将来の世代の資源や繁栄を害することなく、今日の人々に利益をもたらす開発のことをいい、生態環境や当該社会の文化との調和を保ちながら開発をすすめていくタイプの開発」であるが、この開発手法は観光にも適用可能である<sup>31)</sup>。エマニュエル・ドゥ・カットは、「持続可能な観光開発」を、「生態学的に安全であること、小規模生産、物質的な消費以外の必要性の認識、将来の世代を含むあらゆる必要性の平等な考慮、下からの決定などといった特徴をもっている」と述べている<sup>32)</sup>。タイの山岳少数民族村落への観光においても、その展開プロセスの中で起きてきたさまざまな問題に対処するために、また新たな問題が起きないようなかたちで観光開発を進めていくためには、当該社会の人々が観光や開発計画の意志決定のプロセスに参画できる仕組みをつくることが肝要であることが認識されはじめており、実際に、そのような試みがなされている。そこで、タイ最大の非政府組織である「人口コミュニティ開発協会」(Population and Community Development Association, 以下、PDA と表記)が行っている持続可能な観光開発の事例をとりあげてみたい。

## (2) 人口コミュニティ開発協会 (PDA) の活動

PDA は、1974年に設立されたタイ最大の非政府組織 (NGO) である。首都バンコクに本部をおき、チェンマイ、チェンライ、ピサヌローク、ナコンラチャシマーの4支部とタイ全土に展開する17の地域センターを組織している。PDA は、家族計画プログラム、村落開発、水資源開発、医療衛生サービス、エイズケアプログラム、収入増進および職業訓練プログラムなど多彩なプログラムを実施し、タイの貧困層への援助を行っている<sup>33)</sup>。中でも、山岳少数民族が数多く暮らすチェンライ県にある PDA チェンライ支部は、1976年に設立され、山岳少数民族に対する様々な支援プログラムを実施していることで知られている。4階建ての支部ビルの3階には「山岳民族博物館」(Hill Tribe Museum) があ

り、山岳少数民族の衣装、道具などの展示がなされており、山岳少数民族の概要について紹介するスライドショーなどを観ることができる。また、山岳少数民族の生活に「竹」が極めて重要な役割を果たしていることや山岳少数民族とアヘンの歴史などをテーマに、示唆に富む展示がなされている<sup>34)</sup>。また、ここでは「PDA ツアー」と称するチェンライ近郊の観光地や山岳少数民族村落へのツアーを実施している。2006年2月現在、ツアーには半日コースから3泊4日コースまで20近い多彩なプログラムが準備されており、英語を話すことのできるヤオ族、ホー族などの少数民族出身の PDA 専属ガイドが同行し、山岳少数民族の文化や社会について解説してくれる。さらに、山岳少数民族子弟の高等教育をサポートするための奨学金を提供しており、2000年末の時点で総数200名がこの奨学金を受けたという。山岳少数民族村落がある山間部は、冬の間(11月～3月半ば)までは気温が摂氏10度を下回る。そこで、山岳民族博物館では4歳から10歳の子どもたちに毛布やセーターを提供するプロジェクトを行っている。また、山岳民族博物館で得られる収入から山岳少数民族村落の水資源開発を支援しており、水の面での衛生の向上に役立っている<sup>35)</sup>。

## (3) バーン・ローチャ・プロジェクト

### i) プロジェクト開始の経緯

従来の山岳少数民族村落への観光活動は、彼らの家や小屋の数軒に少しだけ立ち寄り、そこで村では作っていない土産物を買求めるというものだった。このような観光活動では、観光客は山岳少数民族の人々について何も学ぶことなく終わってしまい、観光客と山岳少数民族の交流も期待できない。このような観光活動では、山岳少数民族の村人は小さな飾り物や土産物を執拗に売りがり、しばしば観光客をうるさがらせる結果となる。カラフルな衣装に身を包む女性や子どもの写真を撮れば、その代償として金銭を要求される。このような類の山岳少数民族村落への訪問は、観光客、山岳少数民族双方にとって、楽しくも面白くもなく教育的にも得るところのないものとして終わってしまう。

このような状況から脱却するために、1996年、村落開発と観光を連結する必

要性を認識した PDA チェンライ支部長のソンナム・リワンナ氏は、ローチャ村（バーン・ローチャ）というアカ族村落に社会的インフラとして最初の建物を建設し、村における観光活動の基礎を築いた。当時、ローチャ村にはすでに村人自身で運営されている村銀行があり、村人が様々な経済活動に従事することを可能にしており、水利システム開発、ヘルスケア、家族計画などのような村落開発活動資金の足がかりとなっていた。村人全員が参加している村銀行は、村の運営を強化し、組織的な運営を可能にする媒介装置としての役割も果たしており、収入は毎年末に村人に分配されるシステムになっていた。

このような下地を背景として、「太平洋アジア旅行協会」(Pacific Asia Travel Association 以下 PATA) のタイ支部と、タイ旅行代理店協会 (Association of Thai Travel Agents) がチェンライを訪れ、山岳少数民族村落へのツーリズムに関する新しいモデルに関して議論が行われた。その結果、ツーリズムと山岳少数民族村落の開発を接合する試みがなされることになった。2000年に開始されたこの「もうひとつの観光開発」「持続可能な観光開発」の試みは「バーン・ローチャ・プロジェクト」と呼ばれている。

こうして開始された「村落ベースの観光開発」(Community-Based Tourism Development) の主要目的は、①もうひとつの観光モデルを創出し、山岳少数民族自身の参加を促す、②山岳少数民族の文化保存を支援する、③実施村落 (Ban Lorcha) の収入増進をはかる、というものであった。プロジェクト開始から半年後に、PDA チェンライは、ローチャ村の指導者たちとプロジェクトの内容について議論を行い、どうすれば村人が観光活動に関与できるようになるかが話し合われた。このプロジェクトによって得られた入場料収入 (当初 1 人あたり 40 バーツ。2006 年から 80 バーツ) は村銀行にプールされ、村人に分配されるが、直接プロジェクトに関与している 35 名への分配額は他の村人よりも多い。また、入村料収入は村落開発基金に入り、孤児、未亡人、老人などの生活支援に使われるが、一部は、山岳少数民族観光開発基金に繰り入れられ、他の山岳少数民族村落の観光開発プロジェクトとしても使用される。

このプロジェクトに関して強調されるべき点は、活動が村人たち自身による

運営によるということである。PDA チェンライはプロジェクト開始当初の資金を提供し、村人の訓練や彼らへのアドバイスをを行い、観光客が何を望んでいるかを教える役割を担った。また、英語とタイ語による村内の説明文を作成し、観光客が山岳少数民族の文化を理解するための情報を提供した。最初は、PDA チェンライの山岳民族博物館長であるアルベルト氏自身が、村のごみ拾いをするところから始まったという。アルベルト氏が一人でごみを拾っていると、村の子どもたちが遊び感覚で手伝うようになり、こうして村が少しずつきれいになっていった。村人たちは、このプロジェクトのために時間と労力を費やして、村内をきれいにする努力をしている。

## ii) ローチャ村を歩く<sup>36)</sup>

ローチャ村は、チェンライから国道 1 号線を北上し、途中の町メーチャンから左に折れたタトーンメーチャン国道沿いにある、人口約 350 人のアカ族 (パミ・アカ) の村である。この村は、海拔約 750 メートルのところであり、近くに国民党の村であるメーサロンがあることもあり、村人の多くが中国語を話す。村人の中には、建設労働者として台湾で働いている人も少なくない。気候はおだやかで夏でも比較的涼しいが、12 月から 2 月の冬の時期は涼しく朝晩は寒く、セーターが必要なほどである。

このプロジェクトに直接関与している村人は約 35 名で、1 世帯から 1 名が参加している。全体を統括するスーパーバイザーが 1 名おり、1 日あたり 8 名の村人が関与しながら、1 週間交代で観光客の応対を行っている。この 8 名の内訳は、ビジターセンターにいる入村チケット販売および案内役が 1～2 名、後述の鍛冶屋役の男性が 1 名、歓迎の踊りをする男女が 4 名程度、機織りをする役の女性が 1 名といった具合である。村の駐車場のすぐそばには入村チケット売り場があり、ビジターセンターと民芸品ショップがある。民芸品ショップではアカ族の伝統工芸品などが販売されているが、この村では観光みやげを販売することが主要目的ではない。ビジターセンターでは VTR による村のデモンストレーションが行われ、観光客は村の概要についての「予習」をしてから村に入ることになる。村の案内はタイ語のできる村人がやってくれる。



写真4 パーン・ローチャの地図



写真5 アカ族の文化を学ぶ観光客（ローチャ村）

ここで、(写真4)を参照しながらバーン・ローチャの村内を見てまわることしよう（注：下線部は2004年8月の訪問時にはなかったが、2006年2月の訪問時にあったもの、あるいは、変化がみられたものを示している）。

- \* さまざまな「わな」が作られている。わなは男性が作り、女性は作れないそうだ。 (①と②の間)
- \* 村の入り口に立てられた門に向かって右手には、精霊が住む「神聖な森」が広がり、観光客はここに立ち入ってはいけないという注意書きがある。  
(①と②の間)
- \* アカ族がブランコ祭りで使うブランコがある。(②)
- \* 男女一対の裸の木彫り人形がある門をくぐり村に入る。(③)
- \* 鍛冶屋がいて、仕事をしているところを見せてくれる。(④)
- \* アカ族の村人による歓迎の踊りがなされる。シンバルを持った男性が1名、鐘を持った女性が1名、竹の棒を持った女性が2名（ときに3人）の4名（5名）での歓迎の踊りが行われる。シンバルやゴングを鳴らし、竹を地

面に突き立てながら、右に3歩、左に1歩、膝曲げ右1回、膝曲げ左1回の順に、踊る単調なリズムである (⑤) (写真5)。

- \* 村銀行がある。このプロジェクトをはじめとする村の収入をプールして、村人にローンで貸し出す。この村銀行を利用できるのには、次の条件を満たすことが必要。(⑥)
  - ・村銀行のメンバーであること
  - ・ローンの趣旨を理解し、善良な村人であること
  - ・麻薬に手を出していないこと、麻薬の売買をしていないこと
  - ・森林資源を破壊せず、保全に努めていること
  - ・村落ベースの観光開発プロジェクトに参加していること
- \* ブランコが作られている。 (⑦)
- \* 機織りの女性がいて繭から糸を紡ぐところを見せてくれ、これを使ってアカ族の衣装を織っているところを見せてくれる。(⑦と⑧)
- \* 貯水タンクがあり、タンクにはオーストラリア政府による AUSAID を通

じ援助によると書かれている。(⑧)

\* 観光客に中を見せてくれる家がある。今年、以前なかったカラーテレビとDVDデッキがあった。家には、米貯蔵場があり、離し飼いの数羽の鶏と数匹の豚がいる。近くには果樹園がある。家の中の空間は、入り口に近い男性用の部屋（寝室）と奥の女性用の部屋（寝室）に分かれている。家の外には、昔ながらの米つき器具がある。(⑨)

\* 細い道をしばらく歩くと、儀礼用の水くみ井戸がある。この井戸から水を汲めるのは、呪術師のみであるという表示がなされている。(⑩)

\* さらにしばらく歩くと、国道に出てビジターセンターに帰ってくる。(⑪)

### iii) バーン・ローチャ・プロジェクトの成果と課題

このような新たな観光のありかたに関して、プロジェクトを開始当初から支援し続けているPDA チェンライのアルベルト氏は、次のように成果を語っている<sup>37)</sup>。まず第1に、当初は、村人が伝統的な民族衣装を着用することを躊躇っていたが、このプロジェクト開始以降はこれを躊躇わなくなり、伝統的な民族衣装や自らの伝統文化に誇りを持つようになった。第2に、アカ族の伝統的な織物技術が復興した。第3に、村人全員がプロジェクトによる利益を得るために、以前いたような物乞いがなくなった。そして最後に、村人がそれまで無くしていた自尊心と誇りを取り戻した。このような成果によって、バーン・ローチャ・プロジェクトは、2002年4月にミャンマーのヤンゴンで開催された「第7回メコン観光フォーラム」において幾つかの賞を受賞している。

## 5. 結 語

本稿では、タイの山岳少数民族ツーリズムについて概観し、そこに生起している観光をめぐる影響や問題を提示し、新しい山岳少数民族観光のありかたの一例である「バーン・ローチャ・プロジェクト」について紹介した。1970年代前半頃からはじまった山岳少数民族村落への観光は、マスツーリズム時代を通じて、山岳少数民族村落にさまざまな影響をもたらしてきた。近年の新たな観

光スタイルを模索する時代の流れの中で、タイの山岳少数民族村落においても、「もうひとつの」あるいは「持続可能な」観光が開始され、注目を集めている。NGOの支援によって2000年に開始された「バーン・ローチャ・プロジェクト」とよばれるこの試みは、山岳少数民族村落への観光のありかたに一石を投じ、一定の成果を挙げている。筆者は、このプロジェクトが行われているアカ族村落を4度訪問したが、そのうち2度は、勤務する大学のゼミナールの学生たちとともに訪れた。確かに、他の山岳少数民族村落への観光が、写真を撮り、土産物を購入することで終わる中、ローチャ村への訪問においては、筆者も学生たちも学ぶところが多くあったことは事実である。また、観光は「……ホスト社会自身にとっての文化的アイデンティティをめぐるかけひきが展開される場」<sup>38)</sup>でもあるので、このプロジェクトを通して、ローチャ村の村人が自身と誇りを取り戻し、彼らの文化的アイデンティティの再確認と文化的伝統の復興が行われているという成果も残している。

山岳少数民族の伝統文化は、そのすべてが観光に適合するわけではないが、観光が伝統文化を刺激し、伝統文化の復興や新たな文化創造に関与したり、地域住民の自文化に対する意識を高めて、アイデンティティを育成・強化しつつあることは、「バーン・ローチャ・プロジェクト」が物語っているといえるだろう。しかしながら、バーン・ローチャ・プロジェクトは2000年に開始され、まだ5年が経過したにすぎず、いわば始動の段階にあるにすぎない。このプロジェクトは「両刃の剣」<sup>39)</sup>という側面も持ち合わせており、うまくいかなければ、より急速な村落破壊が進行する恐れもある。村人が外部世界との相互作用の中での微妙なバランスを通して、今後自らのアイデンティティをどう構築していくか、そして、このプロジェクトが本当の意味でこの村に根づき、長期的な成功を収めるかどうかは、まだ結論を出せる段階ではないだろう。現時点においては、「バーン・ローチャ・プロジェクト」は、山岳少数民族村落観光のひとつのモデルとして、他の山岳少数民族村落の観光開発にも、重要な示唆を与えていることは間違いのないところだが、観光開発という名のもとに、地域住民が主体的にマクロな社会システムとの折り合いをつけていける状況が創り



出されるかどうか、そのための人的・経済的支援やソフト面でのサポートが可能かなどについて、長期的な展望が必要になってくるだろう。

## 注

- 1) Smith, V. L. (ed.) 1977 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, University of Pennsylvania Press (三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』頸草書房 1992年)
- 2) 石森秀三(編)『観光の20世紀』ドメス出版 1993年, 山下晋司(編)『観光人類学』新曜社 1996年, 山下晋司『バリー観光人類学のレッスン』東京大学出版会 1999年, 橋本和也『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社 1999年 など。
- 3) Nash, D. 1995 Prospects for Tourism Study in Anthropology, Ahmed, A. and C. Shore eds. *The Future of Anthropology: Its Relevance to the Contemporary World*. London and Atlantic highlands. pp.79-202
- 4) 世界観光機関 (WHO)『世界観光白書』(2003年度版) および, 独立行政法人国際観光振興機構『JNTO 国際観光白書』(2004/2005版) による。
- 5) Appadurai, A. 1990 Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy, Featherstone M., Lash, S and R. Robertson (eds.) *Global Modernities*, London: Sage Publication. pp.295-310
- 6) 山下 1999 p.8 など
- 7) Meyer 1988 *Beyond the Mask*. Saarbrücken: Breitenbach p.63, pp.65-68
- 8) *ibid.* pp.69-73
- 9) TIME 1982 *Lust City in the Far East, Time* (May 5)
- 10) ツーリズムにおける「エロチック」な側面については, 片山2006において, 詳しく論じている。
- 11) Manager 1991
- 12) Cohen 1996 pp.8-9
- 13) *ibid.* pp.9-12
- 14) *ibid.* pp.12-14
- 15) 山岳少数民族に関する記述は, *Tribal Museum* (Ministry of Social Development and Human Security) および, 山岳民族博物館 (チェンライ) で入手したさまざまな資料によりまとめた。
- 16) 片山隆裕 2003「ラオ・コンタイ・チャーオ・カオタイ山地民におけるエスニシティの再構築と NGO—」片山隆裕(編著)『民族共生への道—アジア太平洋地域のエスニシティ—』九州大学出版会 p.224
- 17) Cohen 1996 pp.67-8

- 18) *ibid.* pp.120-1
- 19) *ibid.* p.15
- 20) 筆者は, 1993年から2002年までの間に, この村を15回ほど訪れているが, この10年の間にこの村を訪れる観光客の年齢層は大きく拡大したことを観察している。
- 21) たとえば, チェンライから車で1時間ほどの距離にあるポンパケム村 (ヤオ族) には, 2006年はじめの旅行シーズンには次々に大型バスが到着し, 西洋人の団体観光客が訪れていた。
- 22) 筆者は, 先述したチェンライ県のポンパケム村 (ヤオ族) のほか, 後述する同じくチェンライ県のローチャ村 (アカ族) でこのような点を観察した。また, 電気がきていないチェンライ県フアイメーサイ地区のジャレー村 (ラフ族) では, 自家発電によってパソコンを使った旅行者向けの村の紹介が行われていた (2006年2月)。
- 23) 2006年2月, この村を3年ぶりに訪れた筆者は, あるパダウン族の女性と, 彼女たちが首に巻く真鍮のリングの値段交渉をタイ語で行った。当初, 3000バーツの言い値だったこの真鍮のリング (パダウン語でトゥンリャンという) を筆者は激闘の交渉の末, 2000バーツで購入することになった。値段が折り合って, 品物を受け取った筆者は, 習いたてのパダウン語で「トゥライブナー」(ありがとう) と言ってみたところ, その女性の口から「どういたしまして! お元気で。また来てね!」という流暢な日本語が話されたことに驚いた。
- 24) Cohen *ibid.* pp.84-5
- 25) *ibid.* pp.84 また, 筆者が訪れたことのあるチェンマイ県パイ地区では, 多くの西洋人旅行者が麻薬やアヘンを吸っているという情報を, 複数回, 耳にしたことがある。
- 26) *ibid.* p.85
- 27) *ibid.* p.94
- 28) 山下晋司 1999 前掲書 p.160
- 29) 石森秀三 1990「国際観光アカデミー—観光研究の最近の動向」『民博通信』(47) pp.77
- 30) Yamahita, S., K. H. Din, and J.S. Eades (eds.) 1997 *Tourism and Cultural Development in Asia and Oceania*, Bangi, Malaysia: UKM Press pp.24-6
- 31) 山下 1999 前掲書 p.167
- 32) De Kadt, E. 1992 Making the Alternative Sustainable: Lessons from Development for Tourism, (in) Smith, V. and W.R. Eadington (eds.) *Tourism Alternative*, Philadelphia: The University of Pennsylvania Press.
- 33) PDA の活動については, PDA 発行のパンフレット, ウェブサイト (<http://www.pda.co.th/>) などを参照している。
- 34) 筆者は, 1998年3月に PDA チェンライ支部をはじめて訪問したが, そのとき以来, 毎年, 年に2回以上ここを訪問をしている。友人の山岳民族博物館館長アルベルト氏やスタッフのドゥワンチャイさんほかスタッフから, 様々なご教示を得ている。誌

上を借りて、感謝申し上げたい。

35) PDA チェンライ支部が実施している様々なプロジェクトや PDA ツアーに関する議論は別の機会に行いたい。

36) 筆者は、2004年8月にはじめてこの村を訪問し、その後、2005年3月に1度、2006年2月に2度、計4度訪問した。

37) 2006年2月15日の PDA チェンライ・山岳民族博物館長のアルベルト氏談による。

38) 山下 1996 前掲書 p.229

39) 前出、アルベルト氏の言葉である。

